

「転用」の物語

——ヘンリー・ジェイムズの『少年と他の人々』論——

町田みどり

『少年と他の人々』(A Small Boy and Others)は、亡き兄ウィリアム・ジェイムズ(William James)の追想録あるいは家族史を意図して書き始められたものの、執筆過程で自伝に変わっていったという複雑な成立事情のために、家族史とも自伝とも言い切れない曖昧な性質を持った作品である。この作品がジェイムズ研究において近年に至るまで十分な扱いを受けてこなかったのも、

「自伝」というジャンルの研究の後発性もさることながら、この曖昧性に拠るところが大きい⁽²⁾。本作品を自伝として読もうとする場合、ジェイムズ自身とは関係が希薄に思われる一族のエピソードの部分をどう扱えばよいのかという問題が絶えず生じてくるのである。しかも「さまよい、脱線するスタイル」⁽³⁾と評されたこの作品では、

クロノロジーも無視された上、何が本題だったのかわからなくなるほど逸脱に逸脱を重ねて無数のエピソードが語られていく。本稿では回想されるがままに渾然と語られるエピソード群を貫くコンテクストを見出し、さらにこの自伝行為を、ジェイムズの人生のコンテクストと関連づけて論じてみたい⁽⁴⁾。

一 分枝する文章

「どの章も、日付だけでなく、語りの内容においても異なるさまざまな要素から成り立っていて……みな語る意識の精神の偶然によって結びつけられているように見える。章だけではなく、段落も文もその材料を不規則な方法で集めているようにみえる」⁽⁵⁾というミリセント・ベ

ル (Millicent Bell) のコメントは『少年と他の人々』を読んだ大方の読者の印象を代弁しているだろう。このベルの指摘は文レベルで経験されたことがそのまま章単位にまで拡大されていると言い換えた方がより適切であろう。なぜならば読者は、既に第一章の文レベルにおいてそのような印象を抱くからである。実に十数行に及ぶ以下の一文にベルの指摘したことがすべて包含されている。

我々の子供時代の世界はともかく素朴な新鮮な息吹を発するのだった。そして私はその純粹な息吹を、我々が幼児期に過ごしたオルバニーの長い夏の午後の大気そのものとして思い出すのだ——そこで過ごした時間は、たっぷりした余暇の味わいがした。まだ本を読むことはできないが、ベッドをいやペビーベッドを離れ始める年齢ではあった。田舎町の一部のようになつていた広大な裏庭で取って食べた桃の味わいがした。それは、さまざま大きな叔父や叔母や従兄弟の味わいがした。また不思議な、伝説的な召使いたちの味わいがした。彼女たちはみな古風なアイルランド人で、彼女たちのお馴染みの台詞

や「人生批評」は代々伝えられていくのだが、はっきりとした親族関係や遠い土地の話も同様で——いつも煙にまかれたような感じを受けたが——それは花開いて、まるで小さな固いすももの実になるかのように、逸話となったのだった。それはとりわけ大きな木陰豊かな饗応する家の味がした。そこでは、穏やかに溜息をつく未亡人となった祖母、旧名キャサリン・バーバーがいて、彼女の態度は、複雑に入り組み増大する人間関係を諦念とともに受け入れていたようで、もてなしを、たしかに、際限ないものではあったが、どうやら喜びもなく、施していたのである。

‘It [the world of our childhood] exhaled at any rate a simple freshness, and I catch its pure breath, at our infantile Albany, as the very air of long summer afternoons—occasions tasting of ample leisure, still bookless, yet beginning to be bedless, or cribless; tasting of accessible garden peaches in a liberal backward territory that was still almost part of a country town; tas-

ting of many-sized uncles, aunts, cousins, of strange legendary domestics, inveterately but archaically Irish, and whose familiar remarks and "criticism of life" were handed down, as well as of dim family ramifications and local allusions—mystifications always—that flowered into anecdote as into small hard plums; tasting above all of a big much-shaded savoury house in which a softly-sighing widowed grandmother, Catherine Barber by birth, whose attitude was a resigned consciousness of complications and creations, dispensed an hospitality seemingly as joyless as it was certainly boundless."⁽⁵⁶⁾

幼いジェイムズの過ぎた長い夏の午後を凝縮したこの文章は、まさしく「さまざまな要素から成り立って」いて「その材料を不規則な方法で集めている」ような印象を与える。ジェイムズの舌に蘇る桃の味わいを表す分詞“tasting”に導かれ、主文から無数に分枝していく文章。一つの記憶を核として次々に思い出されるのは、オルバ

ニーの屋敷の風景、そしてその風景の中に浮かび上がってくる親類縁者や召使いの姿、さらに共起して思い出される、これらの人々が語っていた逸話の数々、それを聞いたときの幼いジェイムズの感情——味覚・視覚・聴覚そして感情の体験が渾然としたまま再現されているように思われる。しかし、全ての要素が“tasting”という分詞／枝によって、繋がれていることから、これらの経験が、蘇った桃の味と共に思い出され桃の味とは切り放せぬ一つの夏の午後の場面であることに読者は気づかされる。ジェイムズは裏庭の桃を食べたという極めて個人的な経験を語ると同時に、そのような夏の午後に集い同じように桃を食べながら会話を交わす親類縁者たちの姿、そして彼らを歓待しつつも自らは会話に加わらず複雑な意識をもって屋敷の中にいる祖母の姿を描き、ジェイムズ一族の歴史のページをも語っているのである。しかし、その一族の歴史の一場面はあくまでもジェイムズ自身の歴史の一部である。なぜなら、見逃してしそうな「まだ本を読むことはできない」という一言は、以降の文章に対して、読書体験以前のジェイムズの想像力を育んだ感性教育としての文脈を示唆するからである。それ

によって、第三番目の“tasting”に導かれる親類縁者の部分での記憶の焦点は、人物にあるのではなく、ジェイムズが耳にしたさまざまな話そのものにあることに我々は気づく。「まだ本を読むことはできない」ジェイムズは、大人たちの話す逸話にいつそう真剣に耳を傾けたに違いなく、“tasting”と言う言葉は、桃を味わうと同時に語られる逸話をも味わい吸収したことを表す。第四の“tasting”に導かれた終結部では、ジェイムズの経験は意識による吸収にまで及び、「饗応する家」の内部にある複雑な意識という現実の人間関係のドラマをも味わったことが暗示されるのである。

このようにして一見断片的な記憶の集合に見えるこの一文は分枝しながらもジェイムズの体内に摂取され血肉をつくった分ち難い経験として一つの本枝につながるものであることが理解される。そして、この構造は文レベルから章レベルへと拡大されていくのである。その点で、表題 *A Small Boy and Others* は作品の内容のみならず構造をも表象し、ジェイムズが意図した以上に適切な表題となっていると言えるだろう。強烈に自己存在を主張し、読者の関心を一点に引きつける“*A Small*

Boy” 続く“and Others”は少年が結ぶ関係の無数の広がりを用意させる。同時に、少年ジェイムズの経験とそれを一つの核として無数に分枝して語られていくエピソード群という構造をも表象しているからである。

二 分枝するエピソード

前項でみた分枝現象は、文レベルにとどまらず、章レベルで行われている。文レベルの場合には全体を俯瞰することが可能であり、本枝とのつながりを確認することができた。しかし、それが章レベルの場合は、分枝の度合いもいっそう増して、流れの確認は不可能に近くなり、それが『少年と他の人々』の受容を困難にしている。ここでは教育の話題から逸脱して広がっていく第三章から第十二章までをその顕著な例として取り上げ、さまよい逸脱すると見えて実は一つの枝に連なっていくものであることを検証する。

第二章において、教育について回想していたジェイムズは、時間的にはかなり先のことになる一八五四年に通った夏期学校を思い出し、第三章では、その夏期学校があった避暑地ニューブライトンについて語り始める。し

かし、話題となるのは、夏期学校での思い出そのものではなく、その夏を共に過ごしたルイ・ド・コペ(Louis De Coppet)少年とのエピソードである。続く第四章ではこの避暑地の社交界の一員し夫人を初めて見かけたジェイムズ一族の集まりの回想をきっかけとして、当時のアメリカの社会・文化状況へと話が広がっていく。第五章以降はニューヨークにおける少年ジェイムズの経験が語られ、再び教育についての話題に戻るのは第十三章においてである。クロノロジーは無視され、場所であれ、人物であれ、あるエピソードのほんの一部が次に語られるエピソードの糸口となるといった具合で、エピソード間のつながりはごく希薄であるように見える。しかし、実はこの一連の逸脱は一八五四年の夏、すなわちジェイムズたちがアメリカで過ごした最後の夏を核としたひとつのまとまりとして構築され、ここでも、ジェイムズはこれらのエピソードが読まれるべきコンテクストの指標を与えている。それは逸脱の契機となったルイとのエピソードである。

その夏ニューヨークには、前年ヨーロッパからアメリカに渡ってきたルイが滞在していた。ヨーロッパ人

の父とアメリカ人の母を持つこの少年は「理論上はアメリカ人で、アメリカに住んでいるが、本性の上ではフランス人」で、ジェイムズに「『ヨーロッパ』の風俗の鮮烈な予表」を与え、彼のヨーロッパとアメリカに対する「忠誠心」を「不均等に分けた」(28)とジェイムズは語る。しかし、ルイの役割は、それだけではなかった。彼はジェイムズに「当時その片鱗すら人に示すことができなかった」文筆の才があると考え、「小説の共同執筆」に誘い、「将来の展望を開いてくれた」(28)のである。

ルイヨーロッパの具現が、ジェイムズの執筆の才能を見抜いて創作行為に誘ったというこのエピソードは、これまでほとんど注目されたことがないが、ヨーロッパとジェイムズのキャリアとの結びつきを象徴する極めて重要なものである。このエピソードが、これ以後綴られるエピソード群の読みにおいて果たす機能を考えればいっそうその重要性が理解されるだろう。このルイとのエピソードには、二つの機能がある。ひとつは、アメリカを舞台にして語られるエピソード群を読む際に依拠すべき視点としてジェイムズのキャリアという視点と「ヨーロッパ」という暗黙のクライテリアを讀者に与えることで

ある。もう一つは現在のジェイムズを読者に想起させ、アイロニーを生じさせることである。「理論上はアメリカ人で、アメリカに住んでいるが、本性の上ではフランス人」と描写されたルイは、生まれはアメリカ人だが、ヨーロッパに住み理論的にはヨーロッパ人といってもおかしくない、自伝を執筆している現在のジェイムズを読者に想起させる。それによって、読者は、どれほど少年時代のアメリカを郷愁的に描こうと、最終的に自分の生きる場としてヨーロッパを選択した作家が抱いているのは単純なノスタルジーではなく、両義的な感情であることを理解するのである。

このルイのエピソードに着目して読むことで、散逸した印象を与えていた第四章以降のエピソード群はひとつのまとまった形を取り始めていく。第四章・第五章では、ダンスに興じるジェイムズ一族の若い叔父や叔母の姿を回想し、家族史の記録者としての務めを果たす一方、アメリカの若者を取りまく「これ程形が整っていないくて、成熟していない」(30) 社会的環境を描き出し、キャリアの場としてのアメリカの不可能性を仄めかす。「陰影がなく、空疎な大気に満たされたアメリカ社会には、ス

ケッチをする人にとって寺院を選択する余地がないのと同様にキャリアの選択の余地もない」(30)。祖父ウィリアム・ジェイムズの膨大な遺産を相続したジェイムズ一族に残された選択は、ヨーロッパに赴くか、さもなければこの「異常なまでに何も備えられていない」アメリカで「内面生活」(34)を送る他はなかったと一族の歴史を語りながら、自分のヨーロッパとの結びつきの運命的必然性を示唆するのである。第六章から第十二章では、同じ一八五四年の夏のエピソードを回想する第七章を中心に、ニューヨークにおけるジェイムズたちの生活が語られる。第七章は第三章と対をなしており、ここで再度ジェイムズとヨーロッパとの運命的結びつきが強調される。第七章における中心のエピソードは共同執筆の計画をしたその夏に、奇しくも「初めての『大人の』小説」(“my first ‘grown-up’ novel”)と出会ったということである。その夏ジェイムズは、『大人の』小説として与えられたマリア・スザンナ・カミングズ (Maria Susanna Cummins) の『街灯点灯夫』(The Lamplighter) を読んでいたが、彼にはどうしてもそれが『大人の』小説とは思われず、ニューヨークの本屋か

らニューブライトンへ戻る船中で読んだ『イニシャル』(The Initials)こそまさしくそう呼ぶに値すると得心する。ジェイムズ・モントゴメリー・トートフィアス男爵夫人(Jemima Montgomery, Baroness Von Tauphoeus)によって書かれたこの小説は、ドイツ滞在中のイギリス青年と下宿先のドイツ人姉妹との間に起こる恋愛を扱い、ジェイムズの小説家としての成功の基盤となった「国際テーマ」の嚆矢ともいえるべき作品であった⁽⁸⁾。ジェイムズが、自国の作家による自国を舞台にした『街灯点灯夫』を成熟したものと認めず「初めての『大人の』小説」という栄誉を『イニシャル』に与えた事実はルイによってヨーロッパとアメリカに対する「忠誠心」を「不均等に」分けられたという一節と照応していると同時に、第四章におけるアメリカ社会の未成熟さの指摘をエコーしている。そしてジェイムズはこの『イニシャル』を手に入れたイギリス風の本屋を回想しながら、自分が如何にイギリスに「奥深いところから感染」し「毒されていた」⁽⁹⁾かを語り、ヨーロッパとの結びつきを強調するのである。

第八章以降は、やがて作家というキャリアにつくジェ

イムズの「想像力がいかに育まれたかという歴史」の「再構築」⁽⁶³⁾として、ニューヨークで見た芝居や、時代を席巻していたディケンズの読書体験及びジェイムズが現実において目撃した——ディケンズばりの——遺産をめぐる親族間の人間ドラマが語られ、話は分枝に分枝を重ね、本枝が見えなくなる程に広がっていく。しかし、第十二章末、第二回万国博覧会用にニューヨークに建てられた水晶宮訪問の際「全てヨーロッパから『持ち込まれた』」もので周りを囲まれ、「自分が何故かヨーロッパにいる」⁽⁶⁶⁾という印象を受けたと語ることで、話題を少年ジェイムズのヨーロッパ意識に戻す。少年ジェイムズがアメリカにいながらも絶えずヨーロッパを意識していたことが再度暗示され、第三章から第十二章にわたる長い逸脱はジェイムズのキャリアの場としてのヨーロッパとの運命的結びつきというひとつのまとまりとして締めくくられるのである。

三 「欠如」のモチーフ

これまで、伝記作家や批評家から指摘されてきたように、『少年と他の人々』においてジェイムズが読者に提

示する自己イメージは一貫してネガティブなものである。クレアの言うように、「自己卑下」が「兄への献辞」の一部であるとしても、作品の最後まで「自分は何かに欠けている、あるいは欠陥があると描き続けている」というキャロル・ホリー (Carol Holly) の指摘通り、ジェイムズは自分には「鋭さが全体的に欠如」(149) し、「珍しいほどの不器用さ」のため「へまをし、失敗」(111) し、「全体的に『足りない』と考えられていた」(129) と語る。しかし、「欠如」(“deficiency”) を指摘する批評家が見落としていているのは、「欠如」はジェイムズ自身についてのみ語られているのではないということである。ジェイムズ個人の歴史、一族の歴史という個々の枝より目を離し、全体を俯瞰するならば、ジェイムズを取りまく全てのものに「欠如」という一つの共通要素が浮かび上がってくるのだ。前項で見たように少年ジェイムズの育ったミリュウとしてのアメリカには「形」がなく、「成熟」もなく、「異常なまでに何も備えられていなかったが、ジェイムズ一族、ジェイムズの受けた教育や生活についても同様に「欠如」が見出される。一族は「当時のアメリカ的才能」である「獲得の能力」

(109) に欠け、「市場の本能が欠落」(110) していた。ジェイムズ家の教育には全く「メソッド」が欠けていて「真剣に計画された教育」とはほど遠いものであったため、「全体的な欠如」(123) と呼ばれている。

更に注目すべきことは、これらの「欠如」には、殆どの場合何らかの形で本来あるべきものの「埋め合わせ」(149) をするものとして「代替物」(“substitute” [125]) が見出されているということである。もし繰り返される「欠如」のモチーフを『少年と他の人々』の顕著な特徴として指摘するならば、その「欠如」には埋め合わせをする「代替物」が付随していることも指摘されなければならない。一族のビジネスの才覚の「欠如」に対しては、その「差引勘定の不均衡を正す」(110) ために「内面生活」があり、叶えられなかったヨーロッパでの「諸国語修得の果敢な探求」には、その「代替物」として、「濃密な媒体に浸され」(117) て街を歩き回るといふ、少なくともジェイムズにとっては「豊かで充実した」(120) 経験が与えられていた。ジェイムズ自身のさまざまな「欠如」にも、「代替物」が与えられている。ウィリアムのような「直接的な実践能力」(“direct and

applied faulty" [171]) がないとしても、「想像力と感受性」が「行動」の代わりには「瞑想」("contemplation" [17]) が、場面を絵筆で表す才能の代わりには「ペン」であらわす才能が与えられていたのである。『少年と他の人々』におけるジェイムズの主眼の一つは、「たくさんのものなしで生きていく運命にあった」(17) ジェイムズが、その「欠如」のひとつひとつに「代替物」を見出し収支を合わせていくことであったと言えるかもしれない。

より正確に言うならば「代替物」を見出し、如何にそれを「埋め合わせ」以上の価値あるものに変えたかを語るうとする試みである。与えられた「代替物」は、そのままで本来与えられるべきものの「埋め合わせ」として十分なものであったわけではない。直接的な関係を持てなかった教師や級友たちが、ジェイムズにとって「単なる現実の關係、もっと平凡な直接的な接觸」をした場合よりも「鮮明さ」を帯び「もっとよいもの」(112) となったとすれば、それは頭の中で彼らをさまざまな架空の存在に仕立てあげるという「想像力」の働きがあったからである。ヨーロッパ滞在において、不運にも病いに見

舞われ、直接的享受の欠如という不利な状況に置かれたジェイムズがわずかに手に入れたものを豊かなものへと変えたのはそこに「呑み込む」("taking in" [158]) という行為があったからである。⁽¹¹⁾ 渡欧以前ジェイムズの「直接的参加」(112) の欠如を埋め合わせていたのは「ぼかんと見とれる」("gazing" [17]) という行為であったが、病床に就いたジェイムズにはそれすら叶わなくなる。そこで、彼は「呑み込む」という手段に訴えるのだ。ジェイムズは、ロンドン到着直後マラリア熱に冒されホテルの一室で過ごしたひとときを、病とは不可分のヨーロッパ滞在の象徴的場面として再現する。その中で少年ジェイムズはベッドに横たわり、窓の外から聞こえてくる「あまたの可能性を示唆する遠くのざわめき」に耳を傾け「意識して呑み込」み、「貴重なすばらしい技」("precious fine art") が「開示」(158) されたようであったと回想される。非内省的な忘我状態を示唆する「ぼかんと見とれる」に対し、「呑み込む」は、主体性と意志的選択を含蓄としてもった能動的行為である。⁽¹²⁾ ジェイムズはこの「呑み込む」行為によって病によって余儀なくされた間接的ヨーロッパ受容を充実したものに換え

たのである。外界と接触できないジェイムズのためにさまざまな報告をするウィルキーの「貢献」も、それ自体が価値ある「代替物」であつたわけではなく、「意識とだけ向かい合っているような時間」に「呑み込む」という「技」を用いてジェイムズが「豊かにならした」(163)からに他ならない。「呑み込む」こと、すなわち自己の内部に食欲に吸収し、想像力で増幅することによってジェイムズは乏しい「代替物」から「利益を得た」(“profited” [159])のである。

ジェイムズは与えられた教育が「欠如」であつたことを振り返りながら、その「欠如」に際し、自分の内部で「内なるつむじ曲がり」(“inward perversity” [122])の作用が働いたと語る。「内なるつむじ曲がり」の作用とは、ジェイムズの説明によれば「無駄で、もともと意図されたのではないものを自分の役に立つものにかえるという働き方」(“converting its uses things vain and unintended”)をし、「本来役立つべく用意されていた正反対のものを顔色なからしめ」「同時にしばしばこちらの方を無と化してしまう」(122)作用である。つまり、この「内なるつむじ曲がり」によって、本来の目的に適

つたものよりも、それが「欠如」したために与えられた「代替物」の方が役立つものに変えられ、逆に本来の目的に適つたものの方が役に立たないものに変えられという「転用」(“conversion”)の作用である。我々が見てきたように、この「転用」は、お粗末な教育に関してのみ行われたのではなく、少年ジェイムズに関わるあらゆる「欠如」の局面で行われてきたと言えるだろう。「欠如」に対して見出された「代替物」は「一時的に……お粗末に見え」(171)ても、「ぼかんと見とれ」たり、「呑み込」んだり、すなわち意識や想像力を働かせるという「やりくりや創意工夫」(“economies and ingenuities” [171])を経て豊かな「利益」に変えられていったのである。複雑に分枝し、絡み合ったエピソードの網の目状の枝に透けて見えてくる本枝とはこの「転用の過程」(122)の物語なのである。

四 「無駄」の意識

『少年と他の人々』は自分が如何に「欠如」を「転用」によって克服したか、如何に不利な状況を「やりくり」し「利益」を上げたかを語る「成功物語」となっている

わけだが、そこに贅りがないわけではない。というのも、ジェイムズは、「欠如」と「代替物」を語るとき、絶えず「無駄」(“waste”)を問題として意識しているからである。ジェイムズが見出した「代替物」は、「転用」によってやがて「利益」を生むのであっても、その場で直接的に利益が得られるものと比較すれば、時間がかかる分だけ「無駄」が多い、すなわち「代替物」には「無駄」が付きものということになる。そのためジェイムズは負け惜しみの屁理屈とも言うべき「無駄」擁護論を展開する。「直接的な実践能力」によって得られる「そのときその場のこれみよがしの利益」(150)よりも、「無駄」を補うために生じる「やりくりや創意工夫」を経て得られたものの方がその分だけいっそう価値があるというのだ。しかし、その一方で自説の妥当性への懐疑の念は払拭できない。第十六章で展開されるジェイムズたちの教育における「無駄」をめぐる執拗なまでの問答には、深い自己懐疑を読みとることができる。ジェイムズは教育における「欠如」の「転用」を語った後、父ヘンリー・シニアの教育理念を弁護して長広舌をふるう。それだけでは飽きたらず、教育上の「メソッド」の必要性を

主張する仮想の論客との問答まで始めるが、そこで焦点となっているのは「無駄」の有無という問題である。「メソッド」擁護派の論客は、「計画を立てて試みた教育」の「すぐれたやりくり」(“the splendid economy”)、「ずっとそれより劣った代替物に含まれる無駄」(“the waste involved in the so inferior substitute” [125])を指摘し、「メソッド」なきところでは、人は「その場のぎ」や「創意工夫」に頼り、「ごまかし上手」(125)になる他ない、つまりところ「無駄」の克服とは「ごまかし」ではないか、と主張して「無駄」を擁護するジェイムズはやりこめられてしまう。ジェイムズ自身が想定したにも拘わらず、肝心の自分の答えのほうは、不明瞭で要領を得ず、相手の問いの方がはるかに説得力があるというこの奇妙な問答は、「転用」の理論は自己欺瞞にすぎないのではないかという懐疑心のあらわれとして読むことができるだろう。

この「無駄」の意識はどこから生じてくるものだろうか? 「無駄」とは、労多くして報われないときにこそ感じられるものであり、己が獲得したものに對し満足しているならば、こういった意識が生じるはずはない。ジ

エイムズ自身が自分の「転用」の結果得た「利益」の価値そのものに懐疑を抱いているからではないだろうか？ なぜなら、彼の得た成果は全て他者からは見えず評価されないものであったからだ。ジェイムズの能力は、兄のウィリアムのさまざまな才能とは異なり、「人様にお見せできる」(“exhibitional” [9]) もではなかった。学校で頭脳優秀さを発揮し、上手に絵を描いてみせるといった形では自分の能力を外に示すことができなかったのである。たとえば、精神の「内部では活発で、生産的で、創意に満ちつ」(“inwardly active, productive and ingenious” [170]) としても、それを形にはできず、「表面上は怠けているようにみえ」、「人に見せられるようなものは全く何も持ち帰らな」(“bringing home nothing in the least exhibitional” [223]) としか解されない。第一章でジェイムズは少年時代の有能な兄と自分の能力差を回想し、次のように感慨にふける。

実際に適用できる能力とえば、想像力と感受性しかないような人間を自然と運命とが扱うときのいい加減なやり方、奇妙な無駄のプロセスに対して私は

不思議の念に打たれる。こういう能力を持った人間は長い年月の間、当惑し、考え込んでいる間は、世間に「見せる」ことのできるものがあまりにないので、わたしはこんなろまを……見本品の入った鞆の鍵をなくしてしまい、他の人が商品お披露目している間、間抜けのように思われるほかのない旅商人にたとえるのである。(8)

「直接的な実践能力」を持ったウィリアムはその才能を発揮し、「商品お披露目」を行っていたのに対し、「想像力と感受性しかない」ジェイムズは、このときその豊かな精神活動の成果を披露する術を持たなかったのだ。ジェイムズが『少年と他の人々』において行ったことは、「や」とポケットの奥に見つけた」(150) 表現の「鍵」で「見本品の入った鞆」を開け、他者には不可視であった少年時代の自己の内部活動とその成果を自伝という「取り出して見せることのできる形」(“in producible form” [17]) で「お披露目」することであったのかもしれない。しかし、既にジェイムズは膨大な作品群を彼の「商品」として世に送り、少年時代には評価されな

かった豊かな内面活動の成果を既に証明した筈である。なぜ本来家族史となる筈のものを自伝に変えてまで、自分の人生の「商品お披露目」をする必要があったのか？それを理解するには、『少年と他の人々』直前のジェイムズの創作活動に目を向ける必要がある。

五 最後の「転用」

自伝研究家ロイ・パスカル(Roy Pascal)によれば、自伝とは、現在の視点に基づいて「人生にあるパターンを課し、そこから首尾一貫した物語をつくること」であり、その点で「過去と現在の共謀」であるという。⁽¹³⁾ジェイムズの自伝が「欠如」から「転用」によって豊かな「利益」をあげる物語であるとすれば、そこにはどのような「現在」の「共謀」があったのだろうか。ジェイムズの自伝執筆に至るまでの数年間を簡単にたどってみよう。

『黄金の杯』(The Golden Bowl) 刊行の翌年一九〇五年、ジェイムズは二十年ぶりにアメリカに帰国し各地を旅行して回った後、八月にイギリスに帰国する。帰国後は、ニューヨーク版選集出版の準備に取り組み、選集は

一九〇七年の十二月より刊行開始される。母国との再会及び幼少期を過ごした思い出の場所の再訪⁽¹⁴⁾といい、過去の作品の再読及び序文執筆といい、偶然とはいえ、この数年間は、自伝執筆の準備をするべく過去の見直しに従事していた感を与える。特に選集出版準備は自伝執筆行為に極めて近いものであったと言えるだろう。ニューヨーク版出版に際し、全集ではなく選集とすることを自ら望んだジェイムズは、四年にわたり、その編集に精力を傾ける。長年の創作活動の末に小説理論を確立した巨匠による再読、そして、現在の審美眼に基づく選定、さらには、加筆改訂というプロセスを経て、選集に収められた過去の作品は、ジェイムズが自分の過去として認めたい理想的な経歴であると同時に、ジェイムズの現在をもなしている。そして序文と厳選された作品とは、理論と実践として相互補完しあい、ニューヨーク版選集とはまさにジェイムズの小説家存在の結晶となっている。また、作品の誕生にまつわるエピソードや創作プロセス⁽¹⁵⁾を語る序文自体が作品の自伝といってよいものだ。と同時に、序文は視点という技法や意識のドラマというテーマなど、ジェイムズ作品を評価するための新しい観点を読者に披

瀝し、ストーリー重視の従来の小説観では評価されなかった彼の作品を無理解から救う試みともなっている。それは『ポイントンの収集品』の序文の中でジェイムズが提唱した芸術の機能の実践と言えるだろう。ジェイムズは、そこで生(life)と芸術の機能の関係について次のように述べている。

人生はすべてを包含する混乱であり、一方芸術は識別そして選択なのである。芸術には堅固な潜在的な「価値」のみが問題なのであって、そのような価値を求めて、ちやうど犬が埋もれた骨を嗅ぎつけるように……鼻を利かしながら探りをいれるのである。……人生がどのように絶えずへまをしでかし、脇道に脱線し、砂漠に道を見失うかを目撃することは、いつだって芸術家にとって興味深いことであろう。

その理由は、勿論人生の方は主題に対して全然直感が働かず、芸術家にとって……有り難い無駄ばかりを繰り返してくれるからである。だからこそ、芸術の崇高なやりくり(“sublime economy of art”)が必要とされるチャンスが生じてくるのである。芸

術はただ救い上げ、切り詰め、蓄え、それから「銀行に預け」、これら粒々辛苦の果実を素晴らしい有用な「作品」に、投資と再投資しながら、生来途方もない濫費家であるわれわれのために、王侯君主(17)のような堂々とした巨利を提供してくれるのである。

つまり、ジェイムズにとって芸術とは、すべて入り交じった混乱状態の中から、そこに埋もれている「価値」を「救い上げ」、「素晴らしい有用な『作品』」に仕立てる「崇高なやりくり」という働きをするものである。選集出版とは、過去のすべて入り交じった作品群の中から、世に評価されずに埋もれている作品を「無駄」から救いだし、加筆、改訂更に序文の付加という「再投資」を経て、新たな作品として世に問う行為として、まさにこの「崇高なやりくり」の実践となっている。

しかしこの選集は「巨利」を生むどころか、エデルの言葉を借りれば「全くの失敗¹⁸⁾」で、選集の印税通知を刊行開始の翌年十月に受け取ったジェイムズは「ショック」を受けた。「作品の一ページ一ページの改善に私が惜しまずに注ぎこんできた」「貴重な工夫と労力」(“the

treasures of ingenuity and labour」の大きさから「かなりの収益があがるようだと結論づけていた」⁽¹⁹⁾だけに、精神的打撃は大きかった。「文学稼業で、これほどまでに商業的に見返りのない作業は例を見なかった」⁽²⁰⁾と後に語るほど、この選集は売れなかったのである。戯曲『ガイ・ドントル』(Guy Domville)のような一作品の失敗とは異なり、ジェイムズの小説芸術の集大成であった選集の失敗は、作家としてのキャリアの最終的失敗を意味することになる。この痛手は大きく、ジェイムズはその数カ月後の一九〇九年初頭から体の変調をきたした上、神経衰弱に陥り、個人的文書を焼いて始末するなど、一時は死を意識するに至った⁽²¹⁾。そしてその翌年、自分の体調も回復せぬまま、相次いで弟と兄の死を迎えたのである。

『少年と他の人々』をこのようなジェイムズの人生のコンテクストの中においてみたとき、「転用」と「無駄」の意識の意味はいっそう明確になる。これまで論じてきた「転用」の作用は、先に挙げた芸術の機能とはほぼ同一の働きをするものと言えるだろう。結局芸術の機能も「転用」も、異なる価値体系の導入によって成立する。

本来の目的を構成する価値体系からすれば、無益と見えるものを、別の価値体系の中に移し変えて見ることで価値を見出すシステムなのだ。つまり、「転用」/芸術の機能によって得られた「価値」は、その価値体系の中でのみ効力をもつ変動的なものに過ぎず、異なる価値体系の中に置かれれば、「価値」は失われる。例えば、ジェイムズにとっては、「豊かで充実した」ロンドン滞在であっても、「諸国語修得」を求めていたウィリアムにとっては「貧しく、無味乾燥で嘆かわしい」⁽¹⁷⁰⁾もの以外の何物でもなかったのだ。ジェイムズがつきまとわれた「無駄」の意識とは、価値体系をずらせばたちまち覆るその転用システムの脆さの意識から生じるものである。実際、選集の失敗は彼の価値体系が読者に拒否された証左であり、自伝に見られる深い自己懷疑もそこから発している。従って「転用」によって得たものの価値を絶対的なもの、少なくとも安定したものにしようとするならば、ジェイムズ個人の価値体系そのものを他者の中にも導入する必要がある。靴を開けて商品/小説を、お披露目/活字にただけでは、十分ではない。その価値は、客/読者に理解されて初めて堅固なものになりうる。

この点で、序文とは、既に述べたように、ジェイムズの小説における価値体系を読者の中に確立しようとする試みだったのである。しかし、選集は、価値の効能書きまで付加した「商品お披露目」であったにも拘わらず失敗に終わり、結果のみから判断するのならば、刊行のために費やした四年間の労力が報われず「無駄」に帰したばかりではなく、ジェイムズの長年にわたる作家としての営為は「無駄」であったということになる。『少年と他の人々』は、他の価値体系の中では「無駄」と位置づけられる自分の人生を「崇高なやりくり」によって「転用」しようとする試みであり、「転用」の人生を語る行為がそれ自体が「転用」の行為となっているのである。

この最後の「転用」はジェイムズに「利益」をもたらしたのだろうか? 「そのときその場のこれみよがしの利益」を軽蔑したジェイムズだったが、このときの「転用」ではすばやく「利益」を得ている。なぜなら、ジェイムズは『少年と他の人々』完成後程なくして甥のハリーに宛ててこう書いているからだ——「私の生きる意志、書く意志はもちろんのこと、私の活力が……沸きあがっ

ているのです」⁽²²⁾と。

(1) 成立事情については *Henry James: Autobiography*, ed. F. W. Dupee (1956; rpt. New Jersey: Princeton University Press, 1983) の「序文及び以下に挙げた書簡を参照。『The Letters of Henry James』, ed. Percy Lubbock (London: Macmillan, 1920), II, p. 248, 357-58, 375. *Henry James Letters*, ed. Leon Edel (Cambridge: Harvard University Press, 1984), IV, p. 794-97. 特に最後に挙げた一九一二年九月二十三日付の甥のハリー宛の書簡は重要。

(2) ジェイムズ研究における自伝の受容については Carol Holly, "The Autobiographies: A History of Readings," in *A Companion to Henry James Studies*, ed. Daniel Mark Fogel (Connecticut: Greenwood Press, 1993) pp. 427-46 を参照。自伝が体系的・分析的研究の対象として認知され本格的理論研究が確立したのは一九六〇年代以降のこと、それ以前は "autobiography" の "auto" の部分には関心が払われず、"auto" が付随しても "biography" となんら変わるというがない、すなわち自伝も伝記同様に客観的な記述が成されているという考えが主流であった。自伝研究史については、以下の文献を参照。 *Autobiography: Essays Theoretical and Critical*, ed. James Olney (Princeton, N. J.: Princeton UP, 1980), pp. 20-

21. ウィリアム・C・スペンシマン著船倉止恵訳『自伝のかたち——文学ジャンル史における出来事』(法政大学出版局、一九九一年)。

(3) Millicent Bell, "Henry James and the Fiction of Autobiography," *Southern Review*, 18 (1982), p. 469.

(4) 自伝行為と人生のコンテクストとの関連性を考察するにあたり Carol Holly, *Intensely Family: The Inheritance of Family Shame and the Autobiographies of Henry James* (Madison, Wis.: University of Wisconsin Press, 1995) に一部示唆を受けた。

(5) Bell, p. 470.

(6) Henry James, *A Small Boy and Others* (1913) in *Henry James: Autobiography*, ed. F.W. Dupee, pp. 4-5. 以下、作品からの引用は同書に依り、本文中の括弧内に引用ページ数を記すことにする。訳文は舟阪洋子、市川美香子、水野尚之三氏の共訳『ヘンリー・ジェイムズ自伝——ある少年の思い出——』(臨川書店、一九九四年)を一部手を加える形で使用させて頂いた。特に本稿で問題の一部となる“economy”という語の解釈については筆者と異なっている。

(7) エデルの『ヘンリー・ジェイムズ——未だ試されぬ頃』(*Henry James: The Untried Years, 1843-1870* [Philadelphia: Lippincott, 1953]) におづろきえ一言も言及がなく、ラ・クレアの伝記では、言及はなされているものの『少年と他の人々』から原文をそのまま引用して紹

介するだけに終わっている。Robert LeClair, *Young Henry James: 1843-1870* (New York: Bookman, 1955), pp. 122-26. 筆者の知る限り、このエピソードは、その後『少年と他の人々』を扱った論文でも取り上げられていない。

(8) 『イニシヤル』とジェイムズ自身の「国際小説」との関係について Oscar Cargill, "The First International Novel," *PMLA*, LXXIII (September 1958), pp. 418-25 を参照。

(9) LeClair, p. 42.

(10) Holly, p. 77.

(11) 少年ジェイムズのヨーロッパ滞在については、拙論「少年ジェイムズのヨーロッパ」、『一橋論叢』第一一八巻第三号(一九九七年)五一—六六頁を参照のこと。

(12) ヘルは『少年と他の人々』におけるキーワードとして、“gape”に着目し、口を開けるという含意があることから、それは「みつめる対象を自己の奥深くまで「呑み込」みたいという願望の現れである」という秀逸な解釈を示している。Bell, p. 473. もっともヘルは「ぼかんと見とれる」と「呑み込む」という行為の区別をしていない。しかし、ここで指摘したように、両行為は本質的に異なるものだ。そして、本稿では触れることができなかったが、しばしば論議的となるジェイムズの「アポロンの間」の悪夢の解釈にはこの両行為の相違が重要な役割を果たすものと筆者は考える。

- (13) Roy Pascal, *Design and Truth in Autobiography* (London: Routledge, 1960), p. 11.
- (14) 『少年と他の人々』の中で、最近訪ねた際には、なっていたかという言及がしばしばなされている。p. 56, 131.
- (15) Leon Edel, *Henry James: The Master, 1901-1916* (New York: Avon Books, 1972), p. 322.
- (16) ウィリアム・ホフマン (William Hoffa) は、ハイムズの自伝を「最後の序文」と呼び、ニョーク版選集の序文との類似性を指摘し、どちらも「形成の原理をつまびらかにすること」を目的としていると述べているが、どちらの序文もそのみを目的としているのではない。“The Final Preface: Henry James's Autobiography,”

- Sevante review* 77 (1969), p. 278.
- (17) *The Art of the Novel* (New York: Charles Scribner's Sons, 1962), p. 120. 訳文は多田敏男訳『コンリー・ハイムズ「ニョーク版」序文集』(関西大学出版部一九九〇年)を一部手を加える形で使用させて頂いた。
- (18) Edel, *Henry James: The Master*, p. 433-34.
- (19) Edel, *Letters*, IV, p. 498.
- (20) Edel, *Henry James: The Master*, p. 339.
- (21) Edel, *Henry James: The Master*, p. 437.
- (22) Lubbock, p. 303.

(一橋大学専任講師)